

度精神障害の転帰決定因に関する国際共同研究」(International Collaborative Study of Determinants of Outcome of Severe Mental Disorders, DOSMeD)に参加することとなった。

こうしたうつ病および統合失調症に関する研究成果が公表されるにつれ、日本からの寄与が知られるようになり、その結果として1979年8月31日付けで「機能性精神病に関する研究協力センター(WHO Collaborating Centre for Research in Functional Psychoses)」と指定されたのである。

WHO研究協力センター(WHO/CC)は指定以来、一定期間、通常は4年に1回、更新していくことになっている。1984年に著者が高橋教授の後任になって、センター長を引き受ける時更新申請をして、1989年1月31日付けで現在の「精神保健研究と研修のためのWHO共同センター、WHO Collaborating Centre for Research and Training in Mental Health」の名称のもと再指定された。この約30年間、WHOによるバックアップを感謝しつつ、われわれ長崎大学医学部の精神神経科学教室は精神保健に関する国際共同研究を継続してきた。

そこで、本文においては、これまでのさまざまな交流について、手元にある資料や情報をもとに言及してみたい。

人的交流

1. 世界保健機関スタッフとの交流

WHOは、世界各地を6カ所(アフリカ・ヨーロッパ・アメリカ・東地中海・南東アジア・および西太平洋の各地域)に区分して、それぞれに地域事務局を設置している。日本は、多数のアジア・オセアニア諸国とともに、西太平洋地域事務局(WHO Regional Office for the Western Pacific, WHO/WPRO)の管轄に含まれている。事務局には、事務局長(Regional Director)のほか精神保健部など各部局のトップ(Regional Adviser in Mental Health and Control of Substance Abuse)が配置され、日本からは中島 宏氏(WHO/WPRO 事務局長からWHO事務総長)、尾見 茂氏(WHO/WPRO 事務局長)、新福 尚隆氏(WHO/WPRO 精神保健部長)などこれまでいくつかのポジションにて相応の役割を果たしてきている。

WHO/CCは、WHO本部や地域事務局のスタッフと綿密な連携が必要とされ、現実に連携してきている。長崎センターでは、本部(HQ)の事務総長(Director-General)、担当部局の部長をスイス・ジュネーブにて、また地域事務局スタッフとフィリピン・マニラで会談し、さらには長崎センター訪問を依頼してきた。また地元の長崎では、WHO/CC開所式や再指定記念式などの折、あるいは連携している共同研究の研究者会議開催などを通して、関係者を招聘して交流を図ってきた。

高橋教授の前任者である仁志川種雄教授は、その在任中に、当時WHO精神保健部長(Director, Division of Mental Health)であった林宗義教授(IPSSのPrincipal Investigator)を第65回日本精神神経学会総会(1968)の特別講演講師として招聘した。

その後を受けて1974年にWHO精神保健部長になったNorman Sartorius教授には、部長

就任直後の頃からご厚誼をいただき、度々訪日あるいは来崎していただいている。高橋教授の下で、WHO 共同研究の打ち合わせをしたり、講演をお願いしたりするときに感じた彼に対する印象は、まさに堂々と意見表明をし、更に数カ国語を流暢に操る素晴らしい熟達した万能の学者で、高橋教授より年配者であると映った。彼は、クロアチア（旧、ユーゴスラヴィア）の Zagreb 大学を卒業後、英国ロンドン大学で Research Fellow となり、すぐに国際的に周知の US-UK プロジェクトで英国側研究員の一人、まもなく精神医学的疫学研究に関する WHO コンサルタントとなり、さまざまな国際共同研究の責任者になっている。

また、当初は WHO/HQ の精神保健部（Department of Mental Health and Substance Abuse）に所属して共同研究スタッフの一人でもあったが、今では Classifications and Terminology, Department of Measurement and Health Information Systems に異動して ICD-11 の開発に精力をつぎ込んでいるトルコ出身の Dr. Bedirhan Üstün も、さまざまなテーマを抱えて、われわれの長崎センターを何度となく訪問してくれた。

われわれの研究室は 1979 年 8 月に WHO/CC 指定を受けたが、直ちに開所式を持つには至らなかった。それ以前に準備する作業が多く、結局 1981 年 2 月に万全の準備をもとに、国際・国内の専門職及び精神保健行政担当および地元の関係者など多数の一般参加を得て、開所式および記念講演会を開催した。当時、同日頃の長崎は例年にない雪まじりの冷え込みで、さらに 1981 年 2 月 23 日から 26 日には教皇ヨハネ・パウロ二世が初めて来日され、25 日夕刻に長崎入り、翌 26 日には酷い大雪のなか早朝から浦上天主堂でのミサ、そして約 57,000 人が待つ長崎市内の松山競技場における野外ミサなどがあり、市内の交通機関は混乱して殆ど麻痺状態に近いものであった。開所式の開始時間を予定から多少遅らせ、夕刻には全ての日程を何とか消化することができた。

つぎは、1989 年に新しい呼称での WHO/CC 再指定を受けたときの開所行事である。このときも、指定されて約 10 ヶ月後の 1990 年 9 月 2 日に再指定の式典および記念講演会を執り行った。気分障害（うつ病）に関する国際共同研究・アジア 3 国共同研究、統合失調症研究などでともに作業してきた海外の研究者達が参集して、素晴らしい講演会にしていた。

DOSMeD の研究者会議は、1977 年以来数年間は頻繁に研究に参加する各センターの所在地で開かれた。その折りの写真を、何葉か紹介してみたい。最も印象に残っているのは、研究の準備段階であった 1977 年の第 1 回会議である。その詳細な経緯は、別に詳記しているので、ここでは省略する。ジュネーヴ（WHO/HQ）での会議の折りには、殆どの場合、会議開催の途中に HQ スタッフからホームパーティーに招待されるという。1977 年のときには、Sartorius 教授夫妻の自宅に呼ばれた。彼らに歓待されたいところだが、招待状のように「cheese and wine party」であり、私はチーズがダメだと云ったことで、夫人がチーズの代わりにと卵焼きを用意していただいた記憶がある。また、そのようなパーティーでは、必ずと言っていいほど、チョットしたスピーチをすることが要求されるらしい（留学してるときにもホームパーティーによべられたが、個人的で家庭的であったせい、そうしたチャンスに出会わなかった）。1977 年までは、そうした経験が全くなかったため、

困っていると隣に座っていたインドの研究者 (Dr. N.N.Wig) が「きみが何か話せば、自分が翻訳してあげるよ」と助け船を出してくれた。私が今夜の招待に感謝し大いにエンジョイしたい旨を日本語で話し、彼が逐語的に (ホントは全くのアドリブで) 英訳してくれた。二人の間には全く打合せがないのだから、私の言っていることと彼の英語の間に全く関係がなかったのは私だけでなく同席していたみんなも承知しており、楽しいお遊びのときにしてくれたのである。とはいえ、なんとも苦いながら楽しいパーティであり、身の細る思いの多い WHO 会議デビューであった。

次は、米国の石油産出地として有名なタルサ(オクラホマ州)で開かれた研究者会議(1992年10月)である。このときは、自然公園に囲まれた広大な敷地いっぱい広がる巨大病院 Laureate Psychiatric Clinic and Hospital の会議室で研究者間の打合せがあり、さらに翌日には同病院講堂で“SYMPTOM ON SCHIZOPHRENIA : In Manifestations, Course and Outcome in Different Cultures”と題するシンポジウムも開催された。DOSMeD の長崎データも解析されつつあったので、その結果とともに、アジアからの統合失調症に関する疫学知見を紹介する講演をした。

さらに次の写真は、イタリア・ボローニアでの会議 (1995 年 9 月) の時のものである。街の何処を見ても歴史的価値に溢れた雰囲気の中、パレス風美術館の講堂を借り切って研究者会議は開かれた。ボローニア大学はヨーロッパ最古の総合大学であったとかで、会議の合間にはボローニア大学の teatro anatomico (解剖学劇場) など、街中に張り巡らされたポルティコ (柱廊) をたどって市内散策をしたものである。ボローニアのあとはベニスに移り、欧州神経精神薬理学会 (ECNP) 第 8 回大会に出席した。学会出席者が多かったのかどうかははっきりしないが、街中のホテルに空室が無いとかで、豪華客船ダフネ (Daphne、チョット老朽化していたみたいだが) の客室に数日間宿泊した覚えがある。

ほかに、ハワイ (米国)、オーフス (デンマーク)、ブエノスアイレス (アルゼンティン) あるいは長崎などで、研究者会議は続いた。時には全体会議、時には registry study、life event study、acute psychoses study などテーマ別の会議である。その都度、会議終了という段になると、スーツケースが行きとは比べものにならないくらいの重さになっていた。1977 年会議には長崎センターから唯一人だけの出席であったが、以後の海外での会議は全て教室の共同研究者 (医局員) に同行してもらった。理由はいろいろであるが、若手の研究者が外国の研究者と出会うことで大いに飛躍して欲しいと考えたからである。

これまでは DOSMeD を中心に記してきたが、われわれの WHO/CC では、ほかにうつ病に関する症状評価法や生物学的診断の可能性あるいは特殊な治療方策の研究、一般診療科における精神科医療の研究、ICD-10 や ICF および WHOQOL に係る研究などがあり、長崎センターとして WHO/WPRO の支援をうけながら行ったアジア 3 国のうつ病研究 (1985~1989) もある。アジア 3 国の共同研究は、中国が未だ国際的に十分に開放的でない時代であり、韓国と中国を何度も往来していることがパスポートで分かり、一時不審がられたこともある。写真は 1985 年および 86 年に上海で撮ったものである。

2. 海外研究者との交流

WHO 共同研究を通じて、世界精神医学会 (WPA)・欧州精神科医会議 (EPA)・環太平洋精神科医会議 (PRCP)・米国精神医学会 (APA)・国際精神医学的疫学協会 (IFPE) など

多くの国際学会の会員になり、時には役員を引き受けたり、役員選挙に引っ張り出されたこともある。

1950年に第1回大会をパリで開催してスタートしたWPAは、そのご数年に1回の頻度で世界大会を開催してきている。著者は、1983年オーストリア・ウィーンにおける第7回大会以降、第8回大会（1989、ギリシャ・アテネ）、第9回大会（1993、ブラジル・リオデジャネイロ）、第10回大会（1996、スペイン・マドリード）、そしてドイツ・ハンブルグでの第11回大会（2000年）などに参加しつつ国際交流を続けてきた。そのうち、アジア地域でのWPA世界大会開催を要望する声が諸外国から大きくなり、結局、2002（平成14）年に日本で第12回大会を開催することになった。そうした中、私自身がWPA Secretariat（理事）に立候補する羽目になったのである。もちろん、残念ながら当選してはいない（実は、対立候補で当選したのは、デンマーク・コペンハーゲンのMarianne Kastrup博士であり、私の留学中にはオフィスで共同研究していた同僚だった。彼女は、今やWPAだけでなくEPAやInternational Cultural Psychiatryなどでもアクティブに活躍している）。

こうしたことによって、諸外国の研究者と出会うことが多く、国内学会の折に特別講師として招聘することができ、長いこと先輩知己として交流してもらってきている。うつ病研究を通じて、その早期気づきや治療、プライマリケアの関与の重要性を啓発するために、高橋良教授が先頭に立って組織された「一般診療科におけるうつ病の予防と治療のための日本委員会（Japanese Committee on the Prevention and Treatment of Depression, JCPTD）」は、今や一般社団法人「うつ病の予防・治療日本委員会（Japan Committee for Prevention and Treatment of Depression、略称は旧委員会と同じJCPTD）」となって活動を継続中であるが、その母体となったのはWHO共同研究（SADD）の研究者たちによる国際組織であるICPTD（International Committee of Prevention and Treatment for Depression、のちにWPAの委員会活動となりWPA/PTDの呼称に変更）であり、そこから多くの海外精神科医と出会う機会を持つことができた。社団法人に組織替えたJCPTDは、著者が理事長職を引き受け、国立精神・神経医療研究センター理事長をはじめ、北海道大学教授や九州大学教授など多数の有能な頭脳とともに、啓発活動を継続している。

また、日本社会精神医学会第8回大会を長崎で主催したとき（1988年）、UCLAのリバーマン教授（Professor Robert Paul Liberman）に「精神分裂病の心理社会的処遇—能力低下と社会的不利の克服」と題するSocial Skills Training（SST）の特別講演をしていただいたことは、その後1995年2月にSST普及協会が国内で設立されるなど、SST実践の顕著な展開をみると、われながら嬉しくなる。

しかし、一方では長年のおつきあいの中で、Erik Strömberg教授（1908-1993）、Mogens Schou教授（オフィス大学、気分障害に対するリチウム療法の確立、1918-2005）、Paul Kielholz教授（バーゼル大学、うつ病に関する病因論的区分仮説の図示、1916-1990）、Lyman C. Wynne教授（ロチェスター大学、統合失調症の家族因としてのPseudomutuality仮説の提案、1923-2007）、John Kenneth Wing教授（ロンドン大学精神医学研究所MRC社会精神医学部門部長、精神症状評価に係る構造面接法PSEの開発、1923-2010）、林宗義（Tsung-Yi Lin）教授（ブリティッシュコロンビア大学、1920-2010）、夏鎮夷（Xia Zhenyi）教授（上海医科大学・上海精神衛生中心、1915-2004）、そして日本では加藤正明教授（東京医科大学・国立精神衛生研究所長、1913-2003）、高橋良教授（1926-1988）などなど、社会精神医学分

野で指導いただいた優れた先達が故人となられた。それぞれに、思い出があり、ご冥福を祈りつつも、懐かしむところ少なくない。

著者は、長崎大学教授を退官（2003年3月）するとともに、WHO/CCのHeadからも辞退することになった。辞退の意向を伝えてまもなく、WHO/HQのDivision of Noncommunicable Diseases and Mental Healthの部長からMember of WHO Expert Advisory Panel on Mental Health（専門家諮問部会）就任の依頼があり、いくらかでも貢献できればと考えて受諾して、2004年5月付で正式就任した。このWHO Expert Advisory Panel部会というのは、薬物・アルコール問題や精神保健などを含む52部門の委員（合計793人、2005年12月現在）で構成され、関係分野では日本から2・3名が委嘱されているように聞いた。一時はWHO/CCのセンター長の一部が選出されており、著者自身が兼務していたこともあった。2年に1回の更新を繰り返しながら、2008年10月にはジュネーブで開催された精神保健ギャップ改善行動計画（WHO/mhGAP）の立上げ会議に出席し、改めて、低・中所得国に対して日本が果たすべき役割を認識させられたものである。上記の専門家諮問部委員は、2010年秋を以て退任した。

3. 国内研究者との交流

われわれの研究室がWHO/CCに指定されたあと、国内で精神医学関連のWHO/CCが増えた時期がある。WHO/HQは加盟国の同意を得て指定しているが、その財政的支援についてはハッキリ言って触れていない。従って、指定されたことに関連の研究を展開しようとすると、国内で何らかのファンドを探すことになる。そうは云っても容易なことではなく、WHO/CCが合同して経済的に支援してくれる基盤を創設しようと動き始めたことがある。その手がかりとして、北海道大学・東京医科歯科大学・国立療養所久里浜病院・福岡大学、そして長崎大学の5センター協力で1991年11月から「WHO CC MHJ ニュースレター（WHO精神保健日本協力センター・ニュースレター）」（8-10頁）をこじんまりとであるが、スタートさせたのである（当時、日本全国では49センターが、いろんな分野で指定されていた）。国内で広くアピールしようと取り組んでみたものの、実際には日常的な作業の多忙さもあって、継続して発刊していくことは難しく、第3号（1993年9月）刊行に止まってしまった。結果的には、周辺からの財政的支援も諦めざるを得なかった。

精神保健関連のWHO/CCグループとして上記大学のセンターなどを中心に、ICD-10の日本導入に関する広範な調査研究を行ったことは、未だに貴重な体験として記憶に残っている。WHOはICD開発に当たって、WPAなど国際学会の協力を希望しているが、国際組織自体だけでなく、世界各国の事情もあって、そうした共同調査が順調に進展しないことがある。ICD-10F/draftが公表された頃、日本国内ではようやく大学紛争が終焉の時期に入ったときであったため、日本精神神経学会がWPA/WHOの委嘱を受けて共同調査を行うという時に至っていなかった。そこで、WHO精神保健日本協力センターが引き受けることとし、その窓口を長崎センターが担ったのである。

WHO/CCは、その運営や研究の展開などをスムーズにするため、国際・国内および地域諮問委員会を設置することが要請されている。国際委員会は共同研究を進める中で国際的

視点に立って具体的な提言や勧告を提供してくれるエキスパートに依頼することになるので、従来からの先輩研究者にお願いしてきた。国内委員会については、国内の WHO/CC のセンター長を始め、やはりシニアの精神医学者に就任を依頼してきた。最後の地域委員会は、長崎大学の学長・医学部長および県市の保健部長などをお願いした。このようなルートを活用して、国内および地域内の研究者諸氏と継続的な交流を図ってきた。

長崎には、精神科教室以外に、しばらくは長崎大学の第一内科学教室（甲状腺ガン）、熱帯医学研究所（新興感染症）、そして国立長崎中央病院臨床研究部（ウイルス肝炎）が WHO/CC となっており、地方都市で 4CCs というのは例外的であり、現代もなお医学・医療の最先端に行く国際都市だと考えている。

研究交流

研究の交流は、長崎大学医学部精神神経科学教室として、WHO 長崎センターとして、さらに著者個人として、海外、国内、そして地域周辺の団体や組織、個人と共に、かなり濃厚に行ってきたという自負がある。結果の中には、日本で初めて得られた臨床知見といえるものも少なくない。統合失調症の年間発生率、発病危険率、おおよそ 20 年を超える初発統合失調症の経過研究、あるいは気分障害に関する長期転帰、臨床症状の地域特性、抗てんかん薬の催奇形性に関する多施設研究、などなどである。特に原子爆弾被爆者における精神保健の状況に関する調査研究は、教室が 1980 年前半の頃から県内で新たに起こった自然災害に関する調査を実施する過程で取り組みはじめた。いわゆる被爆者（hibakusya）に関する身体的側面からの調査研究および支援は時代と共に充実したが、心理的側面からのバックアップは極めて貧弱であり、そのご教室として執拗に続けてきたもので、著者らにとっては「災害精神医学」研究の中核的なものと考えてきている。

こうした共同研究の成果は、科学研究費による場合は各年の研究報告書として、あるいは原著論文として海外誌や国内雑誌に発表してきており、またモノグラフとして出版したものもある。結果の詳細については、文献探索をお願いしたい。ここには、参考文献として、一部の研究に関わる取り組みやプロセスだけを記すことにした。

WHO/CC として、WHO が出版した情報を次々に日本語訳して国内の周知してもらう作業は極めて重要であった。その中心的なものは ICD-10F である。世界精神医学会（WPA）は財政・教育・出版など幾つかの部署（Section）それぞれに理事がいて活発に活動しており、著者はうつ病や統合失調症などについての教育資料開発を担当した。また、アンティ・スティグマ活動の一員として、差別偏見の実際についての国際研究を行いながら、国内の精神医学者とともに、精神疾患に苦悩する人々への偏見・差別解消の動きを出版物として公刊した。また、WPA は世界各地・各国における精神医学へのイメージを明らかにする著書の公刊を計画した時期があり、ドイツ・フランス・スペインなどに引き続き「Images in Psychiatry : Japan」を著者らが編集出版（1999）した。その売れ行きがどうであったかは判然としないが、フランスの出版社 SYNAPSE から発刊するという珍しい経験をさせていただいた。

WHO および WPA での交流をもとに、国内・海外との研究交流も広がった。WHO/WPRO の指導のもとに行った中国上海・韓国ソウルとのうつ病共同研究は、アジア地域におけるうつ病の低有病率に根拠がないことを明らかにし、オーストラリアや他の諸国との比較から精神疾患の日本特性に関するデータなども確認してきた。特に、うつ病と意志決定パターンの関係から、日本人あるいは日本の患者における特徴を検討したこともある。

オーストラリアとの間には、うつ病に関する transcultural な研究だけでなく、既記したような偏見差別に関する実証的研究、あるいは精神疾患に係る普及啓発の先駆的試みを展開している国の一つとして、継続的に交流を保ってきている。それらの成果は、また公表しつつある。

研究結果をまとめたモノグラフや研究の展開に活用した邦訳書などを最後に紹介した。

おわりに

長崎大学医学部精神神経科学教室における、これまでの国際比較共同研究の流れを、WHO/CC を中心にしながら触れてきた。医学部を卒業し国家試験をパスして精神科医になったのが 1964 年、留学して 1 年あまり医局を外れた以外、ほとんど大学内で研究を継続できる幸運に恵まれて、約 45 年間ひたすら社会精神医学的ないし疫学精神医学的研究を展開してきた。そのチャンスを与えてくれた師が高橋良教授であり、Erik Strömberg 教授である。さらに、われわれ長崎大学からの成果を常に評価してくれた Norman Sartorius 教授の永年に亘る支援も忘れられない。

長崎大学を退官後も何かと研究を続ける機会に恵まれて、2012 年 3 月までは「精神障害者への対応への国際比較研究」と題する厚生労働省科学研究を継続する。先進諸国では急速に見直しが進む精神障害者に対する強制入院、および非告知治療などを、国際的現状に鑑み、日本でどのように改善策を立ち上げていくかを検討する研究課題である。このテーマについても、WHO からの現況資料 (Mental Health Atlas) あるいは取組みの指針 (WHO/mhGAP Intervention Guide) などが重要な手がかりになっている。

著者にとって、長崎大学にて展開してきた精神医学研究から、長崎国際大学などでの精神保健福祉研究にシフトしながら、国際研究に従事できることはほんとうに有り難く感謝している。先の恩師に加えて、精神科にて共に研究に参加してくれた多数の医局員諸氏に心から感謝の意を表したい。また、研究分野の性質上、研究対象になっていただく地域住民の協力なくしては、その成果を上げることはできない。従って当然ながら、これまでの地域研究それぞれに協力していただいた住民の方々に深謝する。

参考文献

高橋良：私と社会精神医学 社会精神医学 3, 53, 1980.

高橋良：WHO 主催「うつ病の予防と治療に関する国際シンポジウム」（ワシントン、10月22日～24日、1979年）報告記 精神医学 22, 1113-1118, 1980.

高橋良：巻頭言、精神衛生に関する国際協力活動について 精神医学 23, 1090-1091, 1981.

中島宏：機能性精神病に関する WHO 研究協力センター開所式に寄せて（石沢宗和 訳）精神医学 23, 1092-1093, 1981.

N.サルトリウス：機能性精神病に関する WHO 研究協力センター設立の背景と今後への期待（丹羽初子 訳）精神医学 23, 1094-1098, 1981.

中根允文・高橋良：機能性精神病に関する WHO 研究協力センター 心と社会 No.37. 85-93, 1983

Y. Nakane, Y. Tominaga, K. Araki, Y. Ohta & R. Takahashi: Epidemiologic investigations concerning functional psychoses in Nagasaki city - Influences of the Nagasaki Flood Disaster on mental disorders., In 'Genetic Aspects of Human Behavior' (T.Sakai & T.Tsuboi eds.), Igaku-Shoin Ltd., Tokyo, pp 41-53, 1985.

荒木憲一・高橋良・中根允文・太田保之・石澤宗和・富永泰規・内野淳：自然災害と精神疾患 —長崎水害（1982）の精神医学的研究— 精神神経学雑誌 87, 285-302, 1985.

高橋良教授御転任記念行事委員会（編）：長崎大学医学部精神神経科学教室 14年間の歩み —高橋良教授送別を記念して—（機能性精神病に関する世界保健機関研究協力センター報告、第2報）（The Second Journal of the Nagasaki Collaborating Center of WHO for Research in Functional Psychoses – The history of the Department of Neuropsychiatry, Nagasaki University School of Medicine from 1967 to 1984 – In commemoration of the achievement of Prof. R.Takahashi in our department）、長崎大学医学部精神神経科学教室、長崎、1985.

中根允文・太田保之：精神医学的疫学研究の今日的課題と展望 臨床精神医学 16, 485-491, 1987.

中根允文：「災害と精神障害」、PSYCHO-TOPICS 26-50（長谷川和夫 監修）、台糖ファイザー株式会社、東京、pp 53-56, 1988.

小見山実・島菌安雄・中根允文：追悼、高橋良教授を悼む 精神医学 30, 1380-1383, 1988.

中根允文・荒木憲一：精神医学的疫学研究における継時的調査 社会精神医学 13, 111-116, 1990.

Dept. of Neuropsychiatry: The WHO COLLABORATING CENTRE FOR RESEARCH AND TRAINING IN MENTAL HEALTH, INAUGURATION: January 1989 (Agenda & abstracts), Nagasaki University, Nagasaki, 1990.

Y. Nakane, Y. Ohta & M.H.B. Radford: Epidemiological studies of schizophrenia in Japan., Schizophrenia Bulletin 18, 75-84, 1992.

中根允文：WHO の精神神経疾患への対応 精神医学レビュー No.30 精神疾患の一次予防 105-110, 1993.

中根允文：E. ストレムグレン教授のご逝去を悼む—20年前の北欧を懐かしみつつ— 精神科診断学 4, 489-492, 1993.

Y. Nakane: Manifestations, course and outcome of schizophrenia in Asia—Focused on Japan, China, Korea and Taiwan— The Acta Medica Nagasakiensia 39, 70-79, 1994.

中根允文・塚原美佐子・道辻俊一郎：うつ病の日本の特性—疫学的観点から— 臨床精神医学 23, 5-12, 1994.

菅崎弘之・道辻俊一郎・太田保之・中根允文：精神分裂病に関する国際共同研究—IPSS および Outcome Study について— 精神科診断学 5, 39-53, 1994.

中根允文：精神障害に関する国際共同研究 精神神経学雑誌 97, 471-527, 1995.

中根允文：災害精神医学、精神医学がわかる、AERA MOOK 15、pp 68-69, 1996.

中根允文：わが旅 355；「ポーニアのアナトミコ劇場」、日本医師会雑誌、15, 1700, 1996.

中根允文・吉武和康：WHO の疫学調査 心療内科 1, 332-335, 1997.

中根允文：WHO 指定研究協力センターとしての国際共同研究の経験から 精神神経学雑誌 100, 808-815, 1998.

中根允文：私の恩師 Erik Strömberg 教授、最新精神医学 4, 421, 1999.

Y. Nakane, M. Radford: Images in Psychiatry: Japan. WPA, Synapse, 1999.

中根允文：WHO の精神神経疾患への対応 精神医学レビュー「精神疾患の一次予防」（岡崎祐士 編）30, 105-110, 1999.

菅崎弘之・中根允文・宇都宮浩・今村芳博・石崎裕香：プライマリ・ケアにおける精神疾患の診療パッケージ（WHO 版）の有用性に関するプロジェクト 総合病院精神医学 12, 21-29, 2000.

中根允文・木下裕久：日本における精神医学・医療の国際交流・国際共同研究 精神神経学雑誌 102, 303-307, 2000.

菅崎弘之・宇都宮浩・中根允文：PCD トレーニング・プログラム：長崎における WHO トライアル カレントセラピー Current Therapy 18, 13-17, 2000.

中根允文・中根秀之：世界精神医学とアジア、精神医学研究とアジアとの交流 臨床精神医学 31, 755-763, 2002.

中根允文：こころと社会－長崎大学医学部における最終講義－ 九州神経精神医学 49, 123-133, 2003.

中根允文：北欧の精神医学における精神病の周辺病態 臨床精神医学 32, 783-788, 2003.

中根秀之・中根允文：精神疾患の最新臨床疫学、精神障害に関する疫学データの日本 vs 国際比較 臨床精神医学 34, 933-948, 2005.

Y. Nakane : Evidence and practice in social psychiatry, Japanese Bulletin of Social Psychiatry 14 (supple), 10-22, 2006.

中根允文：災害精神医学の10年－経験から学ぶ、長崎原爆被害者：心理障害認定の道のり 精神医学 48, 273-286, 2006.

中根允文：精神医学の潮流、論文「自然災害と精神疾患」について思う 精神神経学雑誌 109, 633-636, 2007.

中根允文：精神医学的疫学研究の中で経験したこと－重度精神疾患の転帰決定因に関するWHO 共同研究のとき、九州神経精神医学 55, 162-169, 2009.

中根允文（単著）：社会精神医学のいま、中山書店、東京、2010.



WHO研究協力センター開所記念式及び講演会

長崎大学医学部附属病院・
医学部記念講堂

1981.2.26.

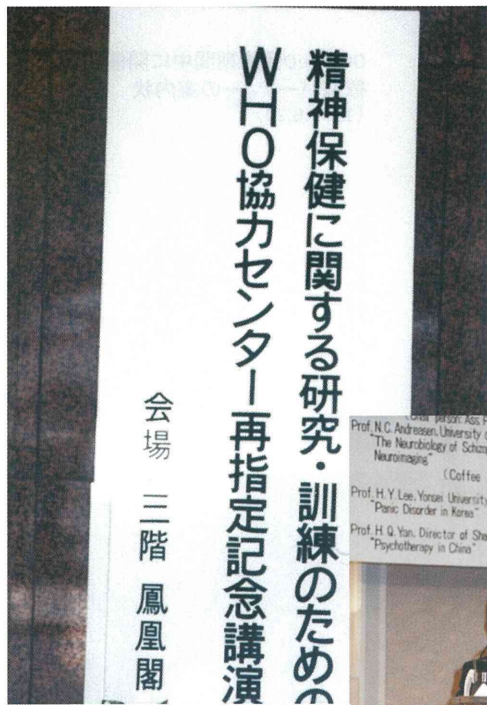
1981.2.23-26.教皇ヨハネ・パウロ二世
来日
25日夕刻、雪降る長崎を訪れ、
26日午前9時45分から「長崎・殉教
者記念ミサ」。
57,000人を前に教皇ミサ、76人の洗
礼式を司式。
同日の深夜、離崎。



THE JOINT MEETING OF ADVISORY COMMITTEES AT THREE LEVELS
(International, National and Local)

At the WHO Collaborating Centre for Research in Functional Psychoses, Department
of Neuropsychiatry, Nagasaki University School of Medicine.

February 26, 1981.



特別講演者 Prof. Y. Okazaki, Nagasaki
 Prof. N. C. Andreasen, University of Iowa (U.S.A.)
 "The Neurobiology of Schizophrenia: New Perspectives from
 Neuroimaging" (Coffee Break)
 Prof. H. Y. Lee, Yonsei University (Korea)
 "Panic Disorder in Korea"
 Prof. H. Q. Yan, Director of Shanghai Mental Health Centre, China
 "Psychotherapy in China"

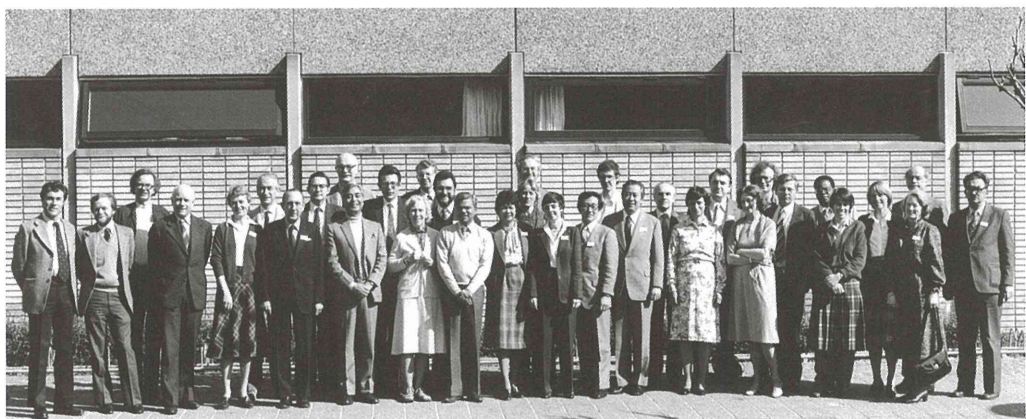


長崎大学医学部精神神経科学教室の
 WHO/CC再指定記念行事
 (1990年9月2日)



第1回
 DOSMeD
 研究者会議
 (Geneva,
 Switzerland,
 WHO/HQ
 1977年12月)

Aarhus,
 Denmark
 における
 DOSMeD
 研究者会議
 1982年4月





DOSMeD会議期間中に開催された
歓迎パーティーの案内状
(1977.6.24)

Dr and Mrs N. Sartorius
of the World Health Organization
request the pleasure of the company of
Dr Y. Nakane
at a cheese and wine party in their home
on Friday 24 June 1977, at 7 p.m.

R. S. V. P.

W.H.O.

Tel. 34 00 61 - Ext. 3608 or 3623

40 chemin des Coudriers
1209 Geneva

パーティ会場でのスナップ、右から
Dr.M.Kastrup, Dr. M.Katz and Dr. N.N.Wig



タルサ(オクラホマ州、USA)で開かれたDOSMeD研究者会議(1992年10月)

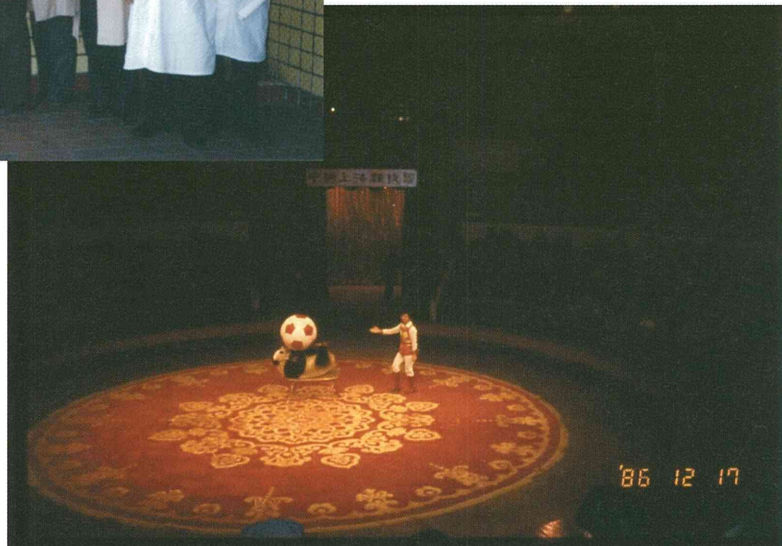


イタリア・ボローニアでのDOSMeD会議(1995年9月)



うつ病に関するアジア3国共同研究
上海精神衛生中心を訪問(1985)、
夏鎮夷 (Xia Zhenyi) 教授 (左から3人目)と
嚴和駿 (Yan He Qin) 教授 (右から2人目)

上海雑技団をエンジョイ(1986)
パンダの玉遊び





Launch of the WHO Mental Health Gap Action Programme (mhGAP) 9 October 2008
Opening Remark by Dr. Margaret Chan , Director-General of the WHO

WHO CCMHJニュースレター 1号

(WHO精神保健日本協力センター・ニュースレター) (1991年11月7日)

発行：WHO精神保健日本協力センター（WHO CCMHJ）連絡会議
 事務局：〒852 長崎市坂本町7-1 長崎大学医学部精神神経科学教室 電話 0958-47-2111内線 2865
 FAX 0958-49-4372

もくじ

- ニュースレター創刊の辞 中根 允文 ◆WHO精神保健日本協力センターの紹介 山下 格
- ニュースレター創刊への祝辞 北海道大学医学部精神医学教室 河野 裕明
- 世界保健機関（WHO）事務総長 中嶋 宏 国立久里浜病院 東京医科歯科大学精神神経医学教室 融 道男
- 同 精神保健部長 N. サルトリウス 長崎大学医学部精神神経科学教室 中根 允文
- 厚生省医療保健局精神保健課長 廣瀬 省 ◆動き（国際疾病分類10版：ICD-10）
- WHO西太平洋事務局（WPRO） 精神保健・薬物依存地域専門官 新福 尚隆 ◇編集あとがき

国内の精神保健関連
 WHO研究協力センター合同の
 ニュースレター
 第1号

WHO研究協力センターの ニュースレター 第2号

WHO CCMHJニュースレター 2号

(WHO精神保健日本協力センター・ニュースレター) (1992年3月19日)

発行：WHO精神保健日本協力センター（WHO CCMHJ）連絡会議
 事務局：〒852 長崎市坂本町7-1 長崎大学医学部精神神経科学教室 電話 0958-47-2111内線 2865
 FAX 0958-49-4372

もくじ

- ◆東京医科歯科大学医学部精神神経医学教室 「生物学的精神医学及び精神保健に関する研究・訓練のためのWHO協力センター」 開所記念シンポジウムと記念式典のお知らせ 東京医科歯科大学センター 融 道男
- ◆WHO専門家委員会「職場における健康推進—アルコールおよび薬物乱用」に出席して 国立久里浜病院センター 樋口 進
- ◆DCR-10の臨床実地試行状況の報告 長崎大学センター 中根允文ほか
- ◆資料 1. 日本におけるWHO指定協力センター一覧 2. WHOコンセンサス・ステイトメント：「うつ病性障害の薬物療法」
- ◆動き ICD-10実地試行地域調整センター長会議
- ◇編集あとがき

中根允文：「災害と精神障害」、PSYCHO-TOPICS 26-50
 (長谷川和夫 監修)、
 台糖ファイザー株式会社、
 東京、pp 53-56, 1988.

PSYCHO TOPICS

災害と精神障害

長崎大学医学部精神神経科

中根 允文

1. ここでいう災害とは何か

近年、精神障害の発病や再発に対するライフストレスの果たす役割に関する研究が数多くなされてきた。こうしたライフストレスは、単に心因性の精神障害にかかわらず、所謂機能的な精神とされている精神分業病や感情障害においても重要な因子となることが知られてきており、Paykel¹⁾やBrown²⁾をはじめとして多くの研究結果が蓄積されつつある。Tennant³⁾は、ライフストレスと精神障害発症の関連について、dose-response modelとthreshold modelおよびU-shaped modelの3種のパターンをモデルとしてあげ、最後のモデルの中に、災害 (disaster) との関わりを



る。日本の「災害対策基本法」(昭和36年11月15日発効)によると、災害とは「暴風、豪雨、洪水、高潮、地震、津波、噴火、その他の異常な自然現象、または大規模な火事もしくは爆発、その他その及ぼす程度においてこれらに類する政令で定める原因により生ずる被害」と、かなり具体的に定められている。一方、精神医学的に見た時、Kinston⁴⁾は「大量の集合的ストレス状況をもたらすもの」と想定しているものの、その分類にあたって、Berren⁵⁾は全ての災害を同等にみなす傾向を批判して、表1に示すような5つの尺度をもとに判断すべきであるとしている。

表1 災害の分類(Berrenらによる)

1. 災害の源(自然：人為、内因：外因)
2. 災害の持続期間(急性：慢性)
3. 個人の脆弱性の程度(重症の慢性者：軽微の被災者)
4. 再発の可能性(高い可能性：無可能性)
5. 将来の再発に対する防止力

2. 災害に関わる心理的反響



20のシエラ
**災害精神医学
 ボランティアが近道**

Noboru Yoshitani
 長崎大学教授 医学部精神神経科 救急室
 一九八八年厚生省「災害と精神医学」研究費
 による調査研究「W.H.O.の「精神保健」に関する研究
 推進のためのシエラ」の一角

中根允文

中根允文：災害精神医学、精神医学がわかる、
AERA MOOK 15、pp 68-69, 1996.

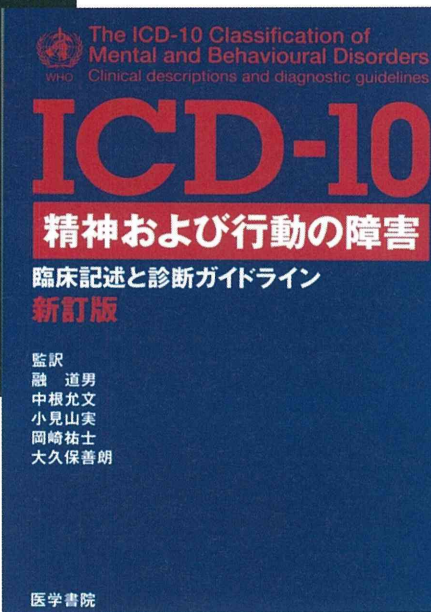
ICD-10 「精神・行動 の障害」 マニュアル

—用語集・対照表付—

中根 允文
 岡崎 祐士

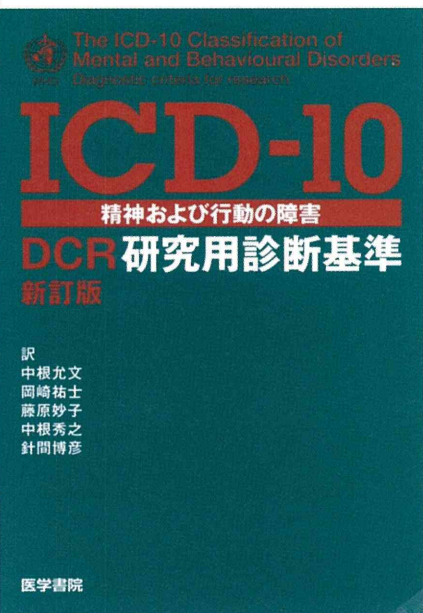
医学書院

ICD-10精神・行動の障害シリーズ マニュアル、臨床記述と診断ガイドライン、研究用診断基準



監訳
 融 道男
 中根 允文
 小見山 実
 岡崎 祐士
 大久保 善朗


医学書院



訳
 中根 允文
 岡崎 祐士
 藤原 妙子
 中根 秀之
 針間 博彦

医学書院

医学書院 刊



WHO
PSYCHOSOCIAL CONSEQUENCES OF DISASTERS
PREVENTION AND MANAGEMENT

**災害のもたらす
心理社会的影響**

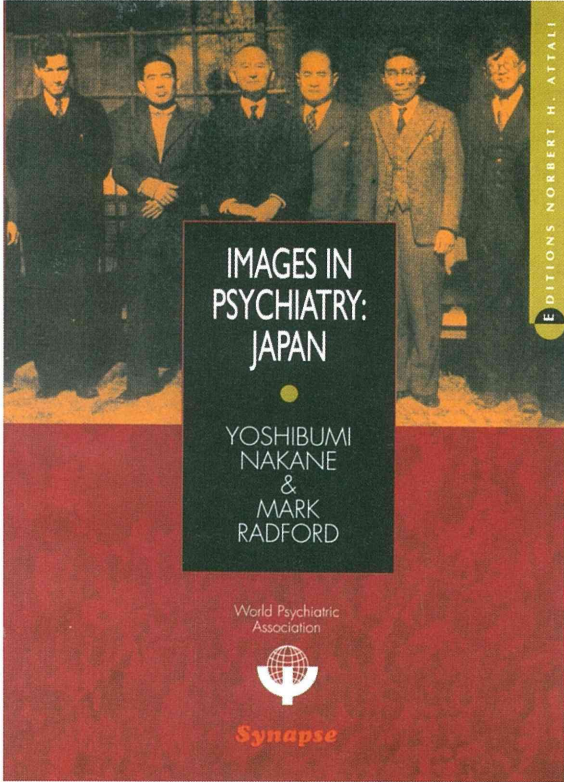
— 予防と危機管理 —

訳
(精神保健の研究と訓練のためのWHO指定協力センター)
長崎大学精神神経科学教室
中根 允文
大塚 俊弘

創造出版

WHO: 災害のもたらす心理社会的影響
— 予防と危機管理 —

日本における精神医学のイメージ (WPA)




EDITIONS NORBERT H. AITALI

**IMAGES IN
PSYCHIATRY:
JAPAN**

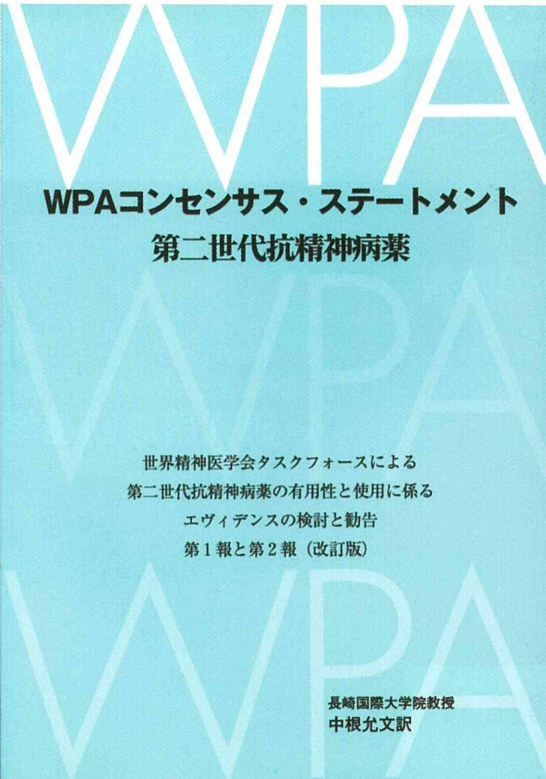
YOSHIBUMI
NAKANE
&
MARK
RADFORD

World Psychiatric
Association



Synapse


WPA出版物の日本語訳 (第2世代抗精神病薬、うつ病の診断と治療)




**WPAコンセンサス・ステートメント
第二世代抗精神病薬**

世界精神医学会タスクフォースによる
第二世代抗精神病薬の有用性と使用に係る
エビデンスの検討と勧告
第1報と第2報 (改訂版)

長崎国際大学院教授
中根允文訳



世界精神医学会



うつ病予防・治療の国際委員会


**WPA/PTD
うつ病性障害教育
プログラム**

WPA WORLD PSYCHIATRIC ASSOCIATION
PTD INTERNATIONAL COMMITTEE FOR
PREVENTION AND TREATMENT OF
DEPRESSION

**WPA/PTD
うつ病性障害の
診断と治療**

<簡易版>

スライド解説書

訳者:  Japan Committee for Prevention and Treatment of Depression
協訳・監修: 長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科
精神病学製薬学 教授 中根 允文

平成 23 年度

「精神障害者への対応への国際比較に関する研究」研究班名簿

研究代表者 中根 允文：長崎大学 名誉教授

研究分担者 岡崎 祐士：(総括補佐) 東京都立松沢病院 院長

(以下五十音順)

伊藤 弘人：(独)国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
社会精神保健研究部長

川口 貞親：産業医科大学産業保健学部 教授

白石 弘巳：東洋大学ライフデザイン学部 教授

新福 尚隆：西南学院大学、人間科学部 社会福祉学科 教授

鈴木 満：岩手医科大学岩手医科大学 神経精神科学講座 客員准教授

鈴木友理子：(独)国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
成人精神保健研究部 災害等支援研究室長

竹島 正：(独)国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所部長

中根 秀之：長崎大学大学院医歯薬学総合研究科、医療科学専攻 教授

西田 淳志：(財)東京都医学研究機構・東京都精神医学総合研究所
心の健康づくりプロジェクト 主任研究員

研究協力者 (五十音順)

青柳 芳克 外務省. 領事局海外邦人安全課 上席専門官 (前)

秋山 剛 NTT 関東病院 精神科

浅野 誠 千葉県精神科医療センター、センター長

吾妻 壮 大阪大学大学院医学系研究科 精神医学教室

荒川 亮介 厚生労働省 精神・障害保健課 心の健康づくり対策官

石本 佳代 東京都立松沢病院精神科

井筒 節 国際連合 管理局 審理官

乾 剛 東京都立松沢病院精神科

板橋 直人 自治医科大学

今井 淳司 東京都立松沢病院精神科

植本 雅治 神戸市看護大学 教授

梅田 ゆい 東京都立松沢病院精神科

梅津 寛 東京都立松沢病院精神科

大澤 達哉 東京都立松沢病院精神科

小澤 寛樹 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科、精神神経科学 教授

神山 昭男	有楽町桜クリニック 院長
河上 緒	東京都立松沢病院精神科
川野 健治	(独)国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
木下 裕久	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科、精神神経科学 講師
金 東善	生活支援センター「ういんぐ」
金 信慧	東洋大学福祉社会デザイン研究科博士前期課程
久保 陽子	産業医科大学産業保健学部 助教
厚東 知成	東京都立松沢病院 精神科
後藤 亮	プラン・ジャパン東日本大震災支援対策室
崎川 典子	東京都立松沢病院
重村 淳	防衛医科大学校 講師
杉浦 寛奈	横浜市立大学精神医学教室
瀬戸屋雄太郎	WHO 本部、元国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所
反町佳穂子	東京都立松沢病院 精神科
田中 和宏	在タイ日本国大使館 医務官
趙 香花	
陳 心怡	産業医科大学医学部精神医学教室 大学院生
堤 敦朗	(独) 国際協力機構 JICA 専門官
寺谷 俊康	厚生労働省精神・障害保健課、課長補佐(前)
成重隆一郎	厚生労働省精神・障害保健課、心の健康づくり対策官(前)
野崎 章子	千葉大学
野中 俊宏	東京都立松沢病院精神科
林 直樹	東京都立松沢病院精神科
半澤 節子	自治医科大学 教授 精神看護学
深澤 舞子	(独)国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 成人精神保健研究部 災害等支援研究室長
藤本 美智子	National Institute of Health
前野 有佳里	九州大学医学研究院保健学部門 助教
増田 尚久	東京都立松沢病院精神科
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター
的場 由木	特定非営利活動法人自立支援センターふるさとの会
三浦 藍	神戸市看護大学 助教
三木 良子	東洋大学ライフデザイン学部
水野 雅文	東邦大学医学部精神医学 教授
村上 裕子	東京海上日動メディカルサービス 臨床心理士
谷田部佳代弥	鹿沼病院
山崎 修道	東京大学医学部附属病院

山中 浩嗣 千葉県精神医療センター 医師
山中 友理 摂南大学法学部
山本 輝之 明治学院大学法学部
吉川 潔 在仏日本国大使館 医務官

Yong Jun Bae 長崎ウエスレヤン大学
Jeong-Kyu Bae Daegu University
Moon-hyeon Chae Taiwha Fountain House